

キャンプクラフトの環境教育的考察 (Ⅱ)

—— 自然と人間の関係の視点から ——

渋谷 寿・小口志磨

A Study of Environmental Education in Camping Craft Activities (Ⅱ) :
From the Viewpoint of the Relation between Nature and Man

Hisashi SHIBUYA and Shima OGUCHI

緒 言

本研究では、キャンプクラフトを学校外教育の野外教育の場で行われるものづくり活動としてとらえ、教育実践を通じた検討を続けている。前報¹⁾では、キャンプクラフトについて環境教育の視点で検討を行い、子ども達が自然を、より認識できうる活動にするためには、筆者ら計画者、指導を行うキャンプカウンセラー、製作を実際に行う子ども達という三者の有機的関連の密度を上げる必要性を明らかにした。そこで、本稿では三者の相互関連の核になり得る「自然と人間の関係」という視点を加え、環境教育の今日的課題である具体的・実践的な方法論を探ると共に、キャンプクラフト実践を通して、教育・指導面に考察的を絞り、指導を実際に行ったキャンプカウンセラーの視点に基づく検討を行いたいと考える。

自然と人間の関係

1. 環境問題と環境教育

近年の「自然と人間」の関係を考える上で、地球の様々な環境問題は最大の問題の一つであろう。大気・水質汚染、森林の減少、砂漠化、二酸化炭素の排出による気温の上昇といった、地球規模の環境問題をあげるのに枚挙に暇はないが、その全ては、人間が自然との関係の秩序を逸脱したための結果である。そして、その認識は徐々に理解され始めてはいるが、大きな問題になるまで、具体的な対策や行動にはなかなか結びつかないのが現状であろう。環境教育はこれらの問題に対する一つの解決への糸口ではあるが、文部省の、小学校における環境教育に対する指針は、子どもの自然環境に対する知識や体験を充実させ、環境の改善や保全に主体的に働きかける行動力を育成するといった基礎的なレベルの位置付けであると言える。²⁾

つまり、日本の学校教育における環境教育は、あくまで現状の問題に対する直接的な解決を目指すのではなく、それ以前の役割が与えられていると言えるだろう。確かにこの部分の重要性は理解できるが、もう一步踏み込んだ環境教育のとらえ方が必要ではないだろうか。すなわち、基礎的な環境教育が、いつかは環境問題の解決に結びつくという消極的な役割ではなく、一つの環境教育が、ごく僅かでも確実に現状を変えていく力に成り得る方法論が求められると考える。

英国のナチュラリストであるライアル・ワトソンは、環境問題に対する解決の方向を明確に打ち出している。彼は、人間の環境破壊と資源収奪の社会から「共生」、「循環」型社会への転

換が必要と考え、次のような予測を行っている。それは、環境破壊の実態がしっかりと人々に伝えられ、環境教育が力をつけるにつれ欲望抑制の考えに基づく「共生」のライフスタイルが根づくというものである。³⁾

これは、多くの人々に支持される考え方だと思われるが、簡単に達成できるとは考えられない。また、現在、発展途上の国々や経済論理優先の社会の人々には支持されるかどうか疑問である。しかし、彼が特に主張している「環境教育」の可能性と、「100匹のサル」論理⁴⁾から導かれる「人間の意識変革」のメカニズムが相互に影響すると、彼の主張が、現状の地球環境を改善する上で妥当性のあるものであると思われる。ここで彼の考え方を、原剛氏のインタビュー⁵⁾から検討してみよう。

ライアル・ワトソンは、彼に対する、「自然と『共生』し、資源の使い捨てによる浪費から『循環』、再利用へ。さらに環境、自然保護型社会づくりへ、全員『参加』と『国際協力』を目指そうと、環境基本法は人間のライフスタイルの切り替えを求めているが、それは可能か」という質問に対して、「その成否は教育にかかっている」と回答している。彼は、宮崎県の幸島における、1匹の猿の、イモを海水で洗って食べる行為が、ある時100匹の猿が行うようになったという事実から、「量から質へ持続する連鎖反応を思わせる変化が、人間の、情報化社会の中で人類の文化が質的に変わり、広がり伝えられ、意識が変えられていく可能性がある」と述べている。さらに、現状の優勝劣敗の関係を生み出す市場経済の中での「共生」の可能性について、「環境破壊の実態がしっかりと人々に伝えられ、環境教育が力をつけるにつれ、世の中は徐々に変わるであろう。現実には、力を合わせて地球の公共財を守り、環境の危機に当たろうという人々も多く、政治の目標がしっかりと定まれば『共生』に向けて社会のしくみを変える力は生まれてくる」と回答している。

彼の主張に添うならば、人間の、環境破壊と資源取奪の社会から「共生」、「循環」型社会への転換の鍵は、本質的な「環境教育」とそれに伴う「意識変革」である。

2. 環境教育と意識変革の可能性

本質的な環境教育とはどのようなものであろうか。1996年9月21日に行われた、雑木林研究会主催の公開シンポジウムにおいて語られた内容は、多くの示唆を与えてくれる。篠田陽作氏は、環境教育の一つの在り方として人工的な都会の中にある公園においても環境教育は可能だとして次の様に語っている。「公園を、自転車遊びやボール遊びをする場だと思っている子ども達は、公園に様々な植物や生物が共生しているという事実にはほとんど気づいていない。しかし、指導者が子ども達に『気づく』導きをすれば、彼らは大人の視点を越えた発見をし、自然素材を用いた遊びも自ら作り出していく。」

ここで重要なのは「気づき」の指導であろう。教えるのではなく、子どもに発見する喜びを経験させることが重要である。そのためには、指導者が身近なところにもある様々な自然の「現れ」に気づく感性を持っていなければならない。これは技術ではなく、自然から学ぼうという指導者自らの姿勢が問われる事を意味する。また、キャンプクラフトの指導をとおして、筆者らは、子どもとは感性豊かで好奇心があり仲間とともに遊びながら様々な事に気づき、知恵を獲得していく存在であることを確認している。しかし、初めてキャンプクラフトを経験する子どもは、素材や道具を前にどう行動すれば良いか戸惑ってしまうのも事実である。この状態は、初めて指導をするキャンプカウンセラーである大学生にも当てはまる。彼らも、子どもと同様に子ども達の前で戸惑ってしまうのである。つまり、これらの事実は、自然や道具に関わる原体験の有無に関わっていると考えられる。原体験としての経験がないと、大人も子どもも、目

キャンプクラフトの環境教育的考察（Ⅱ）

の前の事実に対する「気づき」から派生する能動的な創造作業には導かれないのであろう。環境教育のポイントのひとつは、この「原体験」ではないだろうか。頭では理解できうる環境問題も、体験レベルでの実感が経験されていなければリアリティーはなく解決に向けての行動には結びつかない。この意味で本質的な環境教育の一つの在り方は、計画者が、自然に関わる原体験になりえる高質の活動を用意し、キャンプカウンセラーである指導者が、「気づき」や「知恵の獲得」に結びつく指導を行えば、子どもも指導者も共に成長可能な創造活動が可能になるだろう。つまり、指導者の漠然とした自然に対する態度から、本物・本質を見極めようとする意識の変革に基づく能動的な行為が重要だと言える。「100匹のサル」の論理に添うならば、自然から「気づき」を通して学ぼうとする行動から導かれる活動の集積は、確実に「共生」、「循環」という自然本来が持つ価値観に根ざした社会を生み出すことになると考えられる。キャンプクラフトは、この意味で環境教育の一端を担うべき位置付けにあると考える。

次に、教育実践を通して具体的に検討してみよう。

キャンプカウンセラーの視点によるキャンプクラフト分析

1995年の夏のキャンプにおいて実践した「音の出る虫」製作と、1996年に実践した「バードコール」製作に関する具体的なデータを分析してみよう。「音の出る虫」製作の概要を図1、2に、「バードコール」製作の概要を図3、4に、調査概要を表1に示した。

今回は、キャンプカウンセラーのキャンプクラフト経験回数の差が、どの程度活動の質に影響を与えているか検討するために、カウンセラーの意見を経験回数別に、初回、2～4回、5回以上に分類し、各項目ごとにKJ法に沿った手法により分析し、結果を表2～7に示した。なお、近似項目の要点を〈 〉内に、具体的なカウンセラーの記述を「 」内に、カウンセラーの担当学年と実数を（ ）内に記述した。また、1995年と1996年の夏のキャンプクラフトは、共に生き物がテーマであり、音が出るという点で類似しているため、まとめて集計し、記述の該当年度を（ ）内後部に記載した。

表1 調査概要

テーマ	虫（音の出る虫）	鳥（ハードコール）
調査日	1995年 7月24日、28日	1996年 7月26日、31日
場所	長野県志賀高原木戸池温泉ホテル（24日） 山梨県千代田湖キャンプ場（28日）	静岡県朝霧野外教育センター
主催	山梨大学教育学部山梨幼児野外教育研究会	山梨大学教育学部山梨幼児野外教育研究会
対象	幼児（年長児）キャンプ、OB（小学1、2、3年生） キャンプ担当カウンセラー 男19名 女19名	幼児（年長児）キャンプ、OB（小学1、2、3年生） キャンプ担当カウンセラー 男20名 女20名
調査方法	各班（幼児キャンプ8班「各班幼児約8名」、OBキャンプ11班「各班児童約9名」）のキャンプカウンセラー（男女各1名）が、キャンプクラフト終了後に「クラフト調査用紙」に記入する。	各班（幼児キャンプ8班「各班幼児約8名」、OBキャンプ12班「各班児童約9名」）のキャンプカウンセラー（男女各1名）が、キャンプクラフト終了後に「クラフト調査用紙」に記入する。
調査内容	キャンプクラフトテーマである「虫」の製作の指導を通しキャンプカウンセラーが記述した次の6項目の内容。「キャンプクラフトのテーマ・内容について」、「カウンセラー自身の指導面について」、「子どもの道具使用について」、「子どもの反応について」、「子どもの工夫について」、「マニュアルについて」	キャンプクラフトテーマである「鳥」の製作の指導を通しキャンプカウンセラーが記述した次の7項目の内容。「キャンプクラフトのテーマ・内容について」、「カウンセラー自身の指導面について」、「子どもの道具使用について」、「子どもの反応について」、「子どもの工夫について」、「マニュアルについて」、「環境教育としての試みについて」



図1 音の出る虫製作

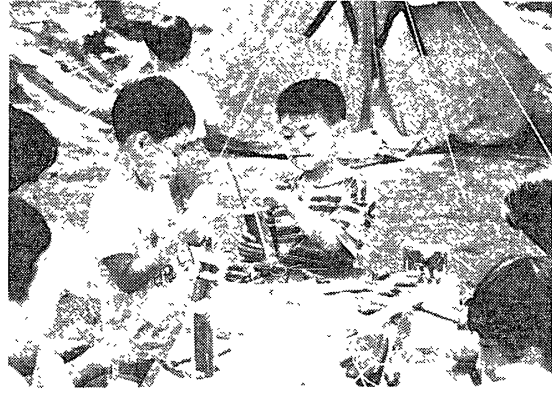


図2 音の出る虫製作



図3 バードコール製作



図4 バードコール製作

1. キャンプクラフトのテーマ・内容について

表2-〈キャンプ活動全体に則したテーマであった〉という意見は1995年、1996年に共通してあげられており、カウンセラー達はこれらのクラフトのテーマがキャンプ活動の流れに適切に感じていたと感じ、このことを肯定的にとらえている。このキャンプ活動には毎年メインテーマがあり、そのテーマに則して各プログラムが行われる。2つのクラフトは、このメインテーマを意識して考えたものではないが、自然を認識する環境教育的な要素を有する内容として計画したため、キャンプ活動に則したものになったと思われる。クラフトのみが独立してしまうのではなく、キャンプ全体のプログラムを考慮しながら、その活動と調和し、周囲の環境を生かせるようなテーマ設定をする事は、環境教育としてより効果的なクラフトを行う上で重要であると考えられる。次に、表2-〈キャンプ活動全体に則したテーマであった〉、〈興味・関心・意欲を高め、楽しめるものであった〉、〈自然を感じられるものであった〉、〈取り組みやすいテーマであった〉という肯定的意見は、経験回数が初回と2～4回のカウンセラーが多いのに対し、5回以上のカウンセラーの意見は少ない。また、〈問題点〉は、初回と2～4回に対し5回以上のカウンセラーから多く出されている。この結果から、経験の少ないカウンセラーは、クラフト自体を新鮮に感じ取ることができるため、肯定的な意見が多いと考えられ、これに対して経験回数の多いカウンセラーは、今まで行ってきたキャンプクラフト経験を基に実践し、クラフトの内容を今までと比較しながら考えることができるため、問題点が見えてくるのではないかと考えられる。また、〈問題点〉は、いずれも1996年のカウンセラーから抽出された意見で

キャンプクラフトの環境教育的考察（Ⅱ）

表2 キャンプクラフトのテーマ・内容について

キャンプクラフトの経験 初回 (25名)	キャンプクラフトの経験 2～4回 (24名)	キャンプクラフトの経験 5回以上 (12名)
〈キャンプ活動全体に則したテーマであった〉		
(1) 「キャンプ全体のテーマに沿って いて良かった」 (幼・小1/2 '96)	(11) 「キャンプ全体のテーマに沿って いた」 (幼・小1/2 '95) (12) 「この場所に適したテーマであっ た」 (小2/1 '96)	(27) 「キャンプとクラフトのテーマが 合っていて良かった」 (幼・小1/2 '96)
〈興味・関心・意欲を高め、楽しめるものであった〉		
(2) 「いろいろな体験ができ、子ども に興味を持たせられる内容であっ た」 (小3/1 '95) (3) 「子ども達を引きつけた」 (小1/1 '95) (4) 「自分だけのものを作ったという 意識を持たせられるものだった」 (小3/1 '95) (5) 「自分で作ったもので遊ぶ楽しさ が味わえる良い機会であった」 (小1/1 '96)	(13) 「子どもと共に楽しんでできた」 (小1/1 '95) (14) 「音が出るものは楽しい」 (小1/1 '95) (15) 「鳥とお話できるという魅力があっ た」 (小1/1 '96) (16) 「鳥を集められるという事が意欲 をそそった」 (幼/1 '96) (17) 「実用性があり子どものやる気に 火をつけた」 (小2/1 '96)	(28) 「自分で考える部分が多く、興味 を持ってできた」 (小2/1 '95) (29) 「最後の展示会をした事が良かつ た」 (小2/1 '95)
〈自然を感じられるものであった〉		
(6) 「自然に近いもので、子ども達が 喜ぶものであった」 (幼・小1/2 '95) (7) 「聴覚で鳥というものが意識でき る良い題材であった」 (幼・小1/2 '96)	(18) 「自然の中の親しみやすい音で良 いと思った」 (小2/1 '95) (19) 「身近な生物に気付かされるテー マであった」 (幼/1 '95) (20) 「視覚、聴覚、触覚をとおして木 の優しさや暖かさ、温もりなどを感 じられた」 (幼/1 '96) (21) 「何気なく聞いているものでも ちょっとした意識の転換で、新鮮に 感じる事ができた」 (小1/1 '96)	(30) 「子どもの自然への意識向上に役 立つ」 (小3/1 '96) (31) 「自然のものとながりのあるテー マである」 (小3/1 '96)
〈取り組みやすいテーマであった〉		
(8) 「形のわりに構造が簡単なのに驚 いた」 (小2/1 '96)	(22) 「取り組みやすいテーマ・内容で あった」 (小1・小2/1 '95) (23) 「作りやすく分かりやすい題材で あった」 (小1/1 '95)	(32) 「子ども達にとって作りやすいも のだと思う」 (幼・小1/2 '96)
〈問題点〉		
(9) 「鳥があまり観察できなかった」 (小2/1 '96)	(24) 「昼間は鳥の声が聞こえず難しい と思った」 (幼/1 '96)	(33) 「オリジナリティーを出す部分が 少なかった」 (小3/1 '96)
〈提案〉		
(10) 「実践する場をもっと取り入れる ことが大切だと思う」 (幼/1 '96)	(25) 「2、3個作るより、1つのもの を集中して作った方が良い」 (幼・小2・小3/5 '95 '96) (26) 「テーマを限定せず自由にしても 良いと思う」 (小3/1 '95)	(34) 「動きがあるものなので、飾りつ けが難しい」 (小3/1 '96) (35) 「大きいほうは子どもの手には大 きすぎた」 (幼/1 '96) (36) 「加工するのに時間がかかる」 (幼・小2・小3/3 '96)

ある。バードコールは、音が出るようになるまでの作業が比較的微妙であるため、表2-(36)「加工するのに時間がかかる」という意見や、そのため、(33)「オリジナリティーを出す部分が少なかった」という感想があげられたと思われる。

以上の考察から、カウンセラーの考え方、感じ方は、個人的な経験回数により一様ではないことが明らかとなった。計画者は、経験回数の差による様々な価値観を持つ、一人一人のカウンセラーが感じた具体的な問題点を、彼らがそれぞれの方法で解決しようとする事ができる柔軟性のあるクラフトのテーマ・内容を提示しなくてはならないだろう。しかし、単なる子どもの自己表現に終らない活動でなければならないと考える。

2. カウンセラー自身の指導面について

表3 カウンセラー自身の指導面について

キャンプクラフトの経験 初回 (25名)	キャンプクラフトの経験 2～4回 (24名)	キャンプクラフトの経験 5回以上 (12名)
〈道具に関する知識・技術について〉		
(1) 「カウンセラー自身道具の使い方に自信がなかった」 (小1・小3/5 '95 '96)	(15) 「道具の危険性、正しい使い方を話した」 (小2/1 '95)	(28) 「小刀を使った事のない子が多く指導に戸惑った」 (小2/1 '95)
(2) 「カウンセラー自身初めて使う道具が多かった」 (幼・小1/2 '95)		
〈指導方法に関する知識・技術について〉		
(3) 「自分の経験のなさを痛感した」 (幼/1 '95)	(16) 「技術的な面での指導がうまくできない」 (幼・小1/4 '95)	(29) 「展示の方法にカウンセラーの1.夫が見られれば良かった」 (小2/1 '95)
(4) 「正しく指導できたか不安」 (幼・小3/2 '95)	(17) 「子どもが作業する際は周囲への配慮が必要である」 (幼・小1/3 '95 '96)	(30) 「技術的な面での指導が難しい」 (小3/1 '96)
(5) 「マニュアルに頼ってしまった」 (小3/1 '95)	(18) 「効率よく作業を進められた」 (幼・小1/2 '95)	(31) 「自分の指導の流れがそれで良かったのかに悩む」 (幼/1 '96)
(6) 「カウンセラー自身が内容を良く分かっていなかった」 (幼・小1・小2/4 '95 '96)	(19) 「安全面に注意して見る事ができた」 (幼・小2/2 '96)	(32) 「自分のものを作る余裕ができ自分なりにクラフトを進められる様になった」 (小2/1 '96)
(7) 「作り方をもう少し展開させておけば良かった」 (幼・小2・小3/5 '95 '96)	(20) 「その場に応じて臨機応変な指導ができなかった」 (幼・小1・小2/5 '95 '96)	(33) 「どの様にすれば作業の流れがスムーズに行くかつかめない」 (幼/1 '96)
(8) 「子ども全員に目が行き届かなかった」 (小1・小3/3 '95 '96)	(21) 「テーマに関する知識が乏しかった」 (幼/1 '96)	
(9) 「子ども1人1人にいろんな道具を持たせた」 (幼/1 '96)	(22) 「『何を感じるか』という踏み込んだ指導ができなかった」 (小1/1 '96)	
〈子どもへの関わり方について〉		
(10) 「子どもにどの程度の技術があるか分からない」 (小2・小3/2 '95 '96)	(23) 「カウンセラー自身が楽しむことが、子どもに意欲をもたせた」 (幼・小1・小2/2 '95 '96)	(34) 「全面的に子ども達にやらせて、あまり手を出さなかった」 (小1/1 '96)
(11) 「カウンセラーが手伝いすぎた」 (幼/2 '95 '96)	(24) 「子どもの発想を大切にした」 (小3/1 '95)	(35) 「事前にテーマに興味を持たせたので音を実感できていた」 (小2・小3/1 '96)
(12) 「口で伝えるだけでは子どもは分かってくれない」 (幼/1 '95)	(25) 「協力する事を伝えた」 (小2/1 '95)	(36) 「カウンセラーが作り出すと子どもも集中して取り組む」 (幼/1 '96)
(12) 「口で伝えるだけでは子どもは分かってくれない」 (幼/1 '95)	(26) 「できない子にかかわる時間を多くした」 (幼/1 '96)	
〈時間的・精神的に余裕がない〉		
(13) 「時間が取れずできない部分が多かった」 (小2/1 '96)	(27) 「余裕、アイデアがなかった」 (幼・小1/3 '96)	
〈要 望〉		
(14) 「事前指導が必要」 (幼/2 '95 '96)		

キャンプクラフト指導の経験回数が初回のカウンセラーは、表3-(1)「カウンセラー自身道具の使い方に自信がなかった」、(2)「カウンセラー自身初めて使う道具が多かった」、(6)「カウンセラー自身が内容を良く分かっていなかった」、(10)「子どもにどの程度の技術があるのか分からない」のように、道具・指導法に関する知識や技術が身につくにつれておらず戸惑いがあることが分かる。また、これらの結果が表3-(4)「正しく指導できたか不安」、(8)「子ども全員に目が行き届かなかった」、(12)「口で伝えるだけでは子どもは分かってくれない」等、多くの指導上の不安や否定的な内容に現れている。キャンプカウンセラーである大学生の多くは、社会の近代化にともない、今の子ども達と同様に、子ども時代に遊びを通して自然と関わるという経験があまりない世代であると思われ、自然の中での創造的な原体験を持つものは非常に少ないと考えられる。しかし、彼らが子どもと同様に何もできないという状況ではクラフトは成立しない。子どもにとって彼らはいくまでもカウンセラーであり、子どもを導くリーダー的役割を果たさなくてはならない。このリーダーの在り方について、篠田陽作氏は「自然の中に踏み込

んだ活動をするためには、リーダーは、自然に対する深い理解と、豊かな経験と感性が必要です。これは、参加者に自然の知識を伝えるだけでなく、体験による感動を与えることが必要だからです。（中略）ですから、リーダー（指導者）は豊富な知識と体験から得た『知恵』を必要とします。』⁶⁾と述べている。カウンセラー達が、この「知恵」を身につけることによって、自然に対する知識や感動を子どもに与えることができ、環境教育としてのクラフトが成立すると考えられる。よって、カウンセラーはこの「知恵」を身につけるため、自ら原体験と言える体験をしておくことが必要である。

表3-〈道具に関する知識・技術について〉の内容を見ると、2～4回のカウンセラーから、自らの道具使用に関する問題は特にあげられなかった。これは、5回以上の経験があるカウンセラーも同様である。また、表3-(15)「道具の危険性、正しい使い方を話した」のように、カウンセラーが一度でも道具を使用していれば、子どもに対しての指導が可能であることが予測できる。また、表3-(16)「技術的な面での指導がうまくできない」、(20)「その場に応じて臨機応変な指導ができなかった」、(22)『『何を感じるか』という踏み込んだ指導ができなかった』という反省から、自分の指導のレベルを高めようという姿勢が見られる。また、5回以上のカウンセラーは、表3-(31)「自分の指導の流れがそれで良かったのかに悩む」というように、具体的な指導の流れを確立し、それを実行し、さらに振り返っていることが分かる。そして、表3-〈子どもへの関わり方について〉から、2回以上経験しているカウンセラーたちは、自分なりの子どもへの接し方を考え、実行していることが分かる。このように、体験したことに基づき、自分の行動を再確認しながら、指導内容を深める姿勢で指導を行うことが、「知恵」を身につけ、より充実したキャンプクラフトを行う上で重要であると考えられる。さらに、表3-(23)「カウンセラー自身楽しむことが、子どもに意欲をもたせた」、(36)「カウンセラーが作り出すと子どもも集中して取り組む」のように、指導者自身がクラフトを楽しみ、活動する喜びを子どもに伝えることによって、子どもの好奇心を高め「作りたい」という意欲、主体性、創造性を引き出すことにつながると考えられる。子ども同様、カウンセラー自身も数々の経験を通して成長していると言えよう。

以上の考察から、クラフトを初めて経験するカウンセラーが、子どもへの接し方、指導の仕方はもちろん、自分自身が道具の使い方も分からず不安な状況であるのに対し、一度でも経験を積んでいるカウンセラーは、クラフトを指導する上で、子どもとどう関わっていきたいのかという基本姿勢を明確にし、楽しんで行う余裕があることが分かった。前者のような経験も、知識や技術を身につけるための大切なステップではあるが、限られた時間内に子ども達が充実したクラフトを行なうためには、道具の使い方やクラフトの流れ等基本的な知識や技術や道具を使う上での「こつ」等の、「知恵」を自らの体験を通して身につけておかねばならないと考える。また、子どもに「作りたい」という意欲を持たせ、そこから主体性・創造性を引き出すためには、まずカウンセラー自身が意欲的に活動することが必要である。従って、計画者は、初めてクラフトを行うカウンセラーが、事前に道具に触れられる場を提供したり、カウンセラー自身が興味を持って活動できるようなクラフトを考えなくてはならない。

3. 子どもの道具使用について

表4-〈上手に使用できなかった〉という意見は、(4)「サイズが合わず力が出せなかった」、(17)「太ゴムをかけるのは1人では難しかった」のように、子どもに道具を使う能力が備わっていない場合と、(9)、(21)、(32)「道具の管理がおろそかになりがちであった」、(20)、(31)「道具の危険性が分かっていない」、(16)、(29)「道具の使い方を把握していない」、(7)「目をはなすと危なっ

表4 子どもの道具使用について

キャンプクラフトの経験 初回 (25名)	キャンプクラフトの経験 2~4回 (24名)	キャンプクラフトの経験 5回以上 (12名)
〈上手に使用できた〉		
(1) 「最初は怖がりながらもきちんとしたやり方でやった」 (幼/1 '96)	(12) 「回を重ねることにうまくなっていった」 (幼・小1・小2/3 '95)	(27) 「カウンセラーが手伝ってあげれば安全に使いこなせる(ノコギリ、クリックドリル)」 (小1・小2/1 '96)
(2) 「上手に使えていた」 (小1/1 '96)	(13) 「順番を決めて使っていた」 (小1/1 '96)	(28) 「道具に関しては口で言うだけで理解していた」 (小2/1 '96)
(3) 「2・3年生なので十分使いこなしていた」 (小2・小3/1 '96)	(14) 「補助があれば大体うまく使える(ノコギリ、クリックドリル)」 (幼/1 '96)	
	(15) 「やすりはうまく使えている」 (小1/2 '96)	
〈上手に使用できなかった〉		
(4) 「サイズが合わず力が出せなかった」 (小2・小3/2 '95 '96)	(16) 「道具の使い方を把握していない」 (幼・小1/5 '95 '96)	(29) 「道具の使い方を把握していない」 (幼/1 '96)
(5) 「使えない道具が多かった」 (小3/2 '95)	(17) 「太ゴムをかけるのは1人では難しかった」 (幼/1 '95)	(30) 「のこぎりの角度が難しいようだった」 (小2/1 '96)
(6) 「ボンドの使い方に苦労した」 (幼/1 '95)	(18) 「ボンドの使い方に苦労した」 (小2/1 '95)	(31) 「道具の危険性が分かっていない」 (小1・小2/3 '95 '96)
(7) 「目をはなすと危なっかしかった」 (小3/1 '95)	(19) 「行動の先の危険性が分かっていなかった」 (小1/3 '95 '96)	(32) 「道具の管理がおろそかになりがちであった」 (小2/1 '95)
(8) 「道具を使っているときは周囲に注意が行き届かなくなる」 (小1・小2・小3/2 '96)	(20) 「道具の危険性が分かっていない」 (幼・小2/3 '96)	
(9) 「道具の管理がおろそかになりがちであった」 (小3/1 '95)	(21) 「道具の管理がおろそかになりがちであった」 (小1・小2/2 '95)	
〈問題点〉		
(10) 「道具が少なかつたため効率よく作業ができなかった」 (小3/1 '95)	(22) 「草地での道具の使用は、難しかったと思う」 (小2/1 '95)	(33) 「小刀の使用は子ども達にとって難しく無理があった」 (幼・小2/5 '95)
(11) 「角材を形にすることは難しく時間がかかる」 (小1/1 '96)	(23) 「角材を形にすることは難しく時間がかかる」 (小1/1 '96)	(34) 「クリックドリルを固定するのは子どもにとって難しい」 (小2/1 '96)
	(24) 「クリックドリルを固定するのは子どもにとって難しい」 (小2・小3/1 '96)	(35) 「道具が少なかつたため効率よく作業ができなかった」 (小1・小2/2 '96)
	(25) 「鉄やすりは重くて使いにくい」 (幼/1 '96)	
	〈初めて道具を使う子が多い〉	
	(26) 「初めて道具を使う子が多かった」 (幼・小1/4 '95 '96)	

かしかった」、(8)「道具を使っているときは周囲に注意が行き届かなくなる」のように、カウンセラーの指導でカバーできる場合とに分けられる。ナイフ、ノコギリ、キリ、彫刻刀、カナヅチ等の道具は補助の工夫をすれば4、5歳でかなり使うことができると言う事実⁷⁾はすでに一般的に知られており、筆者らも実践をとおして幾つかの道具(ノコギリ、クリックドリル、カナヅチ)については、これを確認している⁸⁾。これは表4-(14)「補助があれば大体うまく使える(ノコギリ、クリックドリル)」、(27)「カウンセラーが手伝ってあげれば安全に使いこなせる(ノコギリ、クリックドリル)」という意見からも明らかである。しかし、子ども達が多量の道具を使い、創造的な活動をするためには、カウンセラーの適切な補助が必要な場合が多い。そのためにカウンセラーは、道具や子どもの作業能力に関する知識を身につけ、個々のケースにどの程度の補助が必要か、あるいは不要かといった対応ができなくてはならない。

表4-(33)「小刀の使用は子ども達にとって難しく無理があった」は、すべて5回以上のカウンセラーからの意見であることから指導の難しさが伺える。子どもの作業能力について、須藤敏昭氏・森下一期氏は、「ナイフで鉛筆が削れない、リンゴの皮がむけない、ヒモが結べない、定規が思うように使えない、ノコギリやカナヅチが使えないなどの不器用の実態はいまだに広

キャンプクラフトの環境教育的考察（Ⅱ）

範囲に存在し、そのことによって子どもの活動の幅がおおいにせばめられています。（中略）

『便利さ』や『豊かさ』に囲まれて生活することによって、子どもの内側の力が貧しくなるという皮肉な結果になっているわけです。』⁹⁾と述べている。小刀などのナイフ類は他の道具に比べ多少危険な要素があり、指導上の配慮が特に必要だと思われるが、子どもの創造力や可能性を引き出し、活動の幅を広げるために、あえてそのような道具を使う必要もあるだろう。よって、指導者であるカウンセラー自身が道具の的確な使用法を伝える技術を持っていることが望まれる。

以上の考察から、子どもはクラフト製作を通して様々な道具を使うという原体験を獲得して、道具を使いこなせるようになるであろう。その結果、ものづくりの幅を広め、子どもの可能性や創造性をさらに引き出せるようになると考えられる。そのため、指導者であるカウンセラー自身は、道具を使うことによってその機能や使い方の「こつ」を知り、子どもの作業能力を把握し、的確な指導技術を身につけておかなければならない。経験のないカウンセラーも、自らの原体験になりえるこれらの経験を持つことが求められる。

4. 子どもの反応について

表5 子どもの反応について

キャンプクラフトの経験 初回 (25名)	キャンプクラフトの経験 2～4回 (24名)	キャンプクラフトの経験 5回以上 (12名)
〈楽しみ、喜んでた〉		
(1) 「楽しんで作業していた」 (幼・小2・小3/4 '95 '96)	(11) 「楽しんで作業していた」 (幼・小2・小3/4 '95 '96)	(23) 「鳥と話せる事に喜びを感じていた」 (小1・小2/1 '96)
(2) 「音が出たときは大変喜んでた」 (小1・小2・小3/5 '95 '96)	(12) 「音が出たときは大変喜んでた」 (幼・小2・小3/8 '95 '96)	(24) 「音が出たときは大変喜んでた」 (小1・小2・小3/3 '95 '96)
〈興味・関心を示していた〉		
(3) 「虫に対する関心が高かった」 (幼/2 '95)	(13) 「興味を持続できた」 (小3/1 '95)	(25) 「形にする事に関心があった」 (幼/1 '95)
(4) 「小刀で竹を割る事に関心を示していた」 (幼/1 '95)	(14) 「道具を使う事に興味を示していた」 (幼/1 '96)	(26) 「鳥に興味を持ち出した」 (小2/1 '96)
(5) 「非常に興味を示していた」 (小2/1 '96)		(27) 「音色よりなるかならないかにこだわっていた」 (幼/1 '96)
〈集中していた〉		
(6) 「真剣であった」 (小2・小3/1 '96)	(15) 「夢中になってやっていた」 (小3/2 '95 '96)	(28) 「真剣に取り組んでいた」 (小2/1 '96)
	(16) 「一生懸命取り組んでいた」 (小2/1 '96)	
〈積極的であった〉		
(7) 「音についてみんなで考えていた」 (小3/1 '95)	(17) 「積極的に作ったり遊んだりしていた」 (幼/3 '95 '96)	(29) 「目を輝かせ積極的に参加していた」 (小1・小2/2 '95 '96)
	(18) 「考えながら作業していた」 (幼/1 '96)	(30) 「自分のイメージするものを表現しようとしていた」 (幼・小1/2 '96)
	(19) 「友達同士で指示しあっていた」 (幼/1 '96)	
〈飽きてしまう〉		
(8) 「思うように道具が使えずに飽きてしまう」 (小3/1 '95)	(20) 「削る時間が長く飽きてしまう子がいた」 (幼/1 '96)	(31) 「装飾しない子がいた」 (小1/1 '95)
(9) 「集中力が持続しない子がいた」 (幼・小2/2 '96)		
〈自主性が見られなかった〉		
(10) 「自主的にやってみようという気持ちが少ない」 (幼・小1/3 '95 '96)		(32) 「音が出る事に満足してしまっ形に対する試みが見られなかった」 (小1・小2/2 '96)
	〈協力できた〉	〈協力できなかった〉
	(21) 「友達と協力しあってやっていた」 (小1/1 '95)	(33) 「譲り合いの気持ちがかけていた」 (小1/1 '96)
	(22) 「お互い注意しながら遊んでいた」 (幼/1 '95)	

表5-〈楽しみ、喜んでいた〉は、実数の合計が25と大変多く、ほとんどのカウンセラーが、子ども達はクラフトをすることに楽しさや喜びを感じているととらえている。また、表5-〈興味・関心を示していた〉からは、クラフトを通して自分を取り巻く生き物に気づき、使ったことのない道具に意欲的に触れ、生き生きと活動する姿を感じ取っている。このように、子どもが楽しさや喜びを感じながら、生き生きと活動することが感性の発達に重要な教育的効果を果たしているということは、前報¹⁰⁾でも確認したが、今回は指導者であるカウンセラーが、子どもの感性を伸ばすために具体的にどのように子どもに接すれば良いかという問題について、子どもの反応をもとに考えたい。

表5全体の内容から、経験回数による子どもの反応についてのとらえ方の差はあまり見られなかった。日常生活とは違った状況で活動すること自体が、子どもの好奇心をかきたて、感性を働かせると考えられるため、興味を示したり、楽しんだり、夢中になったりする行動は必然的に子どもの中から生まれてくると思われる。また、表5-(19)「友達同士で指示しあっていた」、(21)「友達と協力しあってやっていた」、(22)「お互いに注意しながら遊んでいた」のように、子どもがお互いに協力し合うという姿勢や、(18)「考えながら作業していた」、(30)「自分のイメージするものを表現しようとしていた」のように、物事をじっくり考えながらイメージを広げるという発展的な行動が見られる。これらは、子ども達の自主的行動であることが望ましいが、カウンセラーのちょっとした言葉がけや援助が、子ども達に協力の姿勢を育て、より発展的な行動へのきっかけになる場合もある。このとき、注意しなくてはならないことは、「リーダーは自然の中の活動で、あくまで子ども達の好奇心や気づきを引き出す事が大切で、決して教えることを優先してはいけません。そこに導くことはあっても、気づくのはいつも子どもであるべきです。」¹¹⁾という篠田陽作氏の言葉のように、クラフトの主人公はあくまでも子どもであり、カウンセラーは子どもが気づき、行動するための手助けをする役割であることを念頭に置いて指導することが重要であろう。

以上の考察から、子どもはそれぞれの感性を働かせながら活動し、協力したり、試行錯誤を繰り返しながら作業を進めるという発展的な活動をしていることが分かる。よって、カウンセラーは、より多くの子どもがお互いに関わりあえる場をつくるために、教えることなく、子ども自身が気づくように導くことを絶えず考えなくてはならない。

5. 子どもの工夫について

表6-〈自然素材を使って装飾をした〉は、初回から5回以上のカウンセラーの合計実数24と大変多く上げられた。作り方の例として葉や枝をつけたものをサンプルとして見せたことが、多少影響していると思われるが、子ども達は自然の中にあるいろいろな形を上手に利用することで、多くのアイデアを生み、イメージを広げていると考えられる。従って、カウンセラーは、このような自然の素材に触れるきっかけを子どもに与える必要があるだろう。

次に、工夫が見られたという意見の経験回数別の総実数を見ると、初回カウンセラー実数が14、2～4回実数25、5回以上9、と初回と2～4回のカウンセラーの実数が多い。これは、経験回数の少ないカウンセラーはクラフトに関する知識・技術が比較的少なく、子どもの視点に近い状態でクラフトに取り組んでいることを示していると考えられる。まず、初回カウンセラーは、知識・技術が少ないという点で否定的要因を持つが、新鮮に子どもの行動をとらえ、ちょっとした工夫に共感することができる点においては肯定的要因も持っている。次に、2～4回目のカウンセラーは、クラフトの概略の流れを知り、子どもの行動を見る余裕も出てくるため、初回のカウンセラーよりも多くの工夫点に気づくのではなかろうか。これに対し、

キャンプクラフトの環境教育的考察（Ⅱ）

表6 子どもの工夫について

キャンプクラフトの経験 初回 (25名)	キャンプクラフトの経験 2～4回 (24名)	キャンプクラフトの経験 5回以上 (12名)
〈自然素材を使って装飾をした〉		
(1) 「まつぼっくり・草など自然素材を飾りつけていた」 (幼・小3 / 3 '95 '96)	(10) 「葉・枝などを使って装飾していた」 (幼・小1・小2・小3 / 15 '95 '96)	(19) 「葉・枝・笹などを使って装飾していた」 (幼・小1・小2・小3 / 6 '95 '96)
〈着色をした〉		
(2) 「色塗りをしていた」 (幼 / 3 '95)	(11) 「着色をしていた」 (幼・小2 / 2 '95 '96) (12) 「鳥の絵や模様を描いていた」 (小1 / 2 '96)	(20) 「色をつけた」 (幼 / 1 '96)
〈破材を使った〉		
(3) 「破材を利用して違うものなどを作っていた」 (小1・幼 / 2 '95)	(13) 「余った竹の節を利用していた」 (幼 / 1 '95)	(21) 「余った材料で火吹き竹を作っていた」 (幼 / 1 '95)
(4) 「スリットの部分や輪切りなど余った竹を利用していた」 (小3 / 1 '95)		
〈自分だけの作品を作った〉		
(5) 「自分のイメージする虫を作っていた」 (小1 / 1 '95)	(14) 「子どもの個性が現れていた」 (小1 / 1 '95)	
(6) 「虫にこだわらず作っていた」 (小3 / 1 '95)	(15) 「虫だけでなく動物も作っていた」 (小1 / 1 '95)	
(7) 「大きさを変えて工夫した」 (小3 / 1 '95)	(16) 「子どもの一人一人のこだわりが現れていた」 (小1 / 1 '96)	
(8) 「ひもの長さを自分に合わせて調節していた」 (幼 / 1 '96)		
〈音に関する工夫があった〉		
(9) 「どうすれば音が良く出るか気づいた」 (小3 / 1 '95)	(17) 「音と同じ虫や動物を作ろうとしていた」 (小1・小3 / 1 '95) (18) 「逆回転にすると音が変わること気付いていた」 (小2 / 1 '95)	(22) 「竹にみぞでなく穴をあけて音を出そうとしていた」 (小2 / 1 '95)
		〈工夫が見られなかった〉
		(23) 「あまり発想力がなく1つのパターンに帰着しがちだった」 (小1 / 1 '96)
		(24) 「工夫力に欠けていた」 (小1 / 1 '96)

5回以上経験を積んだカウンセラーから、子どもの創造性や発見についての積極的な意見はあまり見られない。経験を積むと、知識や技術を獲得し効率的に作業を進めることはできるようになるが、新鮮な気持ちで子どもに接するという姿勢が薄れていくのではないだろうか。筆者（小口）自身、カウンセラーとしてこのような活動に参加していたことがあるが、経験回数を重ねるにつれ、初めて子どもと接した時のように、新鮮な気持ちで感動することが困難になっていくのを身をもって感じるがあった。子どもの行動を敏感に捉え、子どもの工夫を引き出すために、カウンセラー自身もまた子ども同様、初心にかえり新鮮で生き生きとした気持ちで活動に取り組んでいくことが大切であると考えられる。

以上の考察から、子ども達は自然の中にある素材を使うことによって、創造力を豊かにし、既製品では得られない一つ一つ違ったイメージを持って製作していることが理解できた。子どもがそのような自然の素材に五感を通して関わることは、創造力を発揮するきっかけにもなる。クラフト製作を行う上で、カウンセラーは、子どもの創造力や発見に気づき、それを育てていかななくてはならない。そのためには、カウンセラー自身が生き生きと活動に取り組み、新鮮な気持ちで子ども達と自然を共感することが必要である。

6. マニュアルについて

表7 マニュアルについて

キャンプクラフトの経験 初回 (25名)	キャンプクラフトの経験 2~4回 (24名)	キャンプクラフトの経験 5回以上 (12名)
〈有効に使えた〉		
(1) 「マニュアルがあつて良かった」 (小1/1 '95)	(6) 「分かりやすいマニュアルだった」 (幼・小1/2 '95 '96)	(11) 「分かりやすいマニュアルだった」 (小2/1 '95)
(2) 「道具のマニュアルがあつて助かった」 (小2/1 '96)	(7) 「いろいろなパターンが細かく説明されていて良かった」 (幼/2 '96)	
(3) 「良いマニュアルだった」 (小1/2 '96)		
〈要望・提案・問題点〉		
(4) 「キャンプ前に見ておきたい」 (幼/1 '96)	(8) 「字が細かすぎて読みづらい」 (幼/1 '96)	(12) 「マニュアルを見る時間がない」 (幼/1 '96)
(5) 「クラフトの応用を最後に示してはどうか」 (小2/1 '96)	(9) 「ポイントになる部分をもっと詳しく説明してほしい」 (幼・小1/2 '96)	(13) 「ポイントになる部分をもっと詳しく説明してほしい」 (幼・小1・小2・小3/3 '96)
	(10) 「コンパクトで持ち歩けるものが良い」 (小2/1 '96)	

マニュアル¹²⁾ に関してのカウンセラー達の意見を分析すると、解答実数は少ないものの、表7-〈有効に使えた〉のように、特に初めてクラフトを経験するカウンセラーにとってマニュアルは必要であることがわかる。しかし、これらのマニュアルはクラフトを行う前日に配布するため、表7-(4)「キャンプ前に見ておきたい」、(12)「マニュアルを見る時間がない」のように、必ずしも全てのカウンセラーにとって有効な使い方がなされているわけではない。また、表7-(8)「字が細かすぎて読みづらい」、(10)「コンパクトで持ち歩けるものが良い」からは、見やすく使いやすいマニュアルの必要性が求められている。そして、表7-(9)、(13)「ポイントになる部分をもっと詳しく説明してほしい」は、いずれも1996年の意見であるが、これは音を出すための加工が大変微妙だったためにあげられたものと思われる。この意見から、計画者は作業のポイントになる部分に関しての説明の方法論としての、マニュアルの有効な活用法を考える必要がある。

以上の考察から、マニュアルは単に作り方を説明するだけでなく、カウンセラーが子どもを主体的な活動に導くために、見やすく、かつ要点の絞られたもので、応用ができる内容を持っていなければならない。そのため、計画者はマニュアルの内容を再検討し、カウンセラーが事前に熟読できるよう早期に準備することや、作業のポイントになる部分を実践を通して説明する等の必要があると考えられる。

7. 環境教育としての試みについて (1996年度集計分のみ)

表8 環境教育としての試みについて (1996年集計分のみ)

キャンプクラフトの経験 初回 (25名)	キャンプクラフトの経験 2~4回 (24名)	キャンプクラフトの経験 5回以上 (12名)
〈環境教育と結びつく試みがあった〉		
(1) 「ハイキングで鳴らしたら鳥が答えてくれた」 (幼/1)	(2) 「鳥の声を聞いて呼びかけをした」 (幼/1)	(4) 「子どもが鳥を探したり、声を聞こうとしていた」 (小1・小2/1)
	(3) 「木の間を散歩しながら鳴らす」 (小1/1)	(5) 「人間も鳥も同じ生き物だということを知ってもらえた」 (小1/1)
		〈実行できなかった〉
		(6) 「技術不足でうまく使うことができなかった」 (小2・小3/2)
		(7) 「今後やっていきたい」 (小2・小3/1)

キャンプクラフトの環境教育的考察（Ⅱ）

表8のカウンセラーが行った環境教育的活動についての意見は、1996年のみの集計であり、解答実数がわずかであった。経験回数別に見ると、初回のカウンセラーは実数1と大変少ないが、これは環境教育についての深い意識がないためであると思われる。2回以上経験のあるカウンセラー達の意見もそれほど多くはなく、環境教育を意識して活動しているカウンセラーが少ないことが伺える。これは、環境教育という言葉自体が広範囲な領域を示すため、カウンセラーにとって自分達の行っている活動がどのように環境教育と結びついているのかを判断することが難しいためであると考えられる。しかし、カウンセラーの中には、表8-(5)「人間も鳥も同じ生き物だということを知って貰えた」のように、クラフトを通して自然と触れ合い、共生の気持ちを高めるといった環境教育的な活動を行っている者もいる。よって、計画者は、カウンセラー達が環境教育的なクラフト活動を行うための具体的なイメージを明らかにする必要があると考えられる。

結 語

本稿では、キャンプクラフト計画者、指導を行うキャンプカウンセラー、製作を行なう子ども達という三者の相互関連の核になる「自然と人間」の関係に着目し、ライアル・ワトソンの環境問題の解決に向けての、「共生」と「循環」型社会への転換の鍵が「環境教育」と「意識変革」であるという考え方に添って本質的な環境教育の在り方を検討した。その結果、子どもも指導者も環境教育として重要な事は、「気づき」と「原体験」である事を明らかにした。

次に、キャンプクラフト実践後のキャンプカウンセラーを対象とした調査を通して、キャンプカウンセラーに必要とされるものは、その経験によって異なり、特に初経験者は原体験になりえる、自然に対する感性と道具に関する基本技術、子どもの作業能力に対する基礎知識であると言える。これらの知識・技術はカウンセラー自らが体験することによって体得されなくてはならない。また、全てのカウンセラーは、子どもの活動を引き出すためにも、生き生きと新鮮な気持ちで活動に臨み、自らが楽しむ姿勢が求められる。更に、子どもの「気づき」を導くというような、子どもの創造性や自主性を伸ばすためのきっかけ作りや、道具使用の「こつ」等の「知恵」を伝える的確な指導技術を身につける必要があると考えられる。そのために、筆者らクラフトの計画者は、キャンプの具体的な方針に添った、環境教育に展開可能なテーマを設定し、カウンセラー達の要望を反映させた内容を考え、特に初経験のカウンセラーがあらかじめ道具に触れる機会を提供する等の事前指導や、マニュアルの改善（早期配布、ポイントになる部分を明確に記す、読みやすいマニュアル、応用のためのきっかけを記す、環境教育的な造形活動の提案等）を行う必要があると考える。

今後も、子ども達が将来確実に「共生」、「循環」といった自然の秩序を尊重するという共通意識を生み出す事につながる活動の在り方を具体的に検討を続けたいと考える。

本研究に対して全面的にご協力いただいている山梨大学教育学部、山田英美先生、川村協平先生、キャンプカウンセラーの学生諸氏に深謝致します。なお、本論は平成8年度教育研究所一般研究助成の成果の一部である。

文 献

- 1) 拙稿、「キャンプクラフトの環境教育的考察」、名古屋女子大学紀要第42号、pp139～151、1995
- 2) 前掲書1)、pp139～140
- 3) 原 剛、「自然」と「共生」型社会を、毎日新聞、12～13面、1996

- 4) ライアル・ワトソン、『生命潮流』、pp207～209、工作舎、1981
- 5) 前掲書3)
- 6) 篠田陽作、「自然型野外レクリエーション」、p16、第50回全国レクリエーション大会 I N 愛知レジャー・レクリエーション教育部会資料、1996
- 7) 子どもの遊びと手の労働研究会、『子どもの遊びと手の労働』、pp117～119、あすなろ書房、1976
- 8) 拙稿、「野外教育における造形活動 (第2報)」、名古屋女子大学紀要第34号、pp235～247、1988
- 9) 子どもの遊びと手の労働研究会、『子どもに遊びと手の労働のすばらしさを 1 児童期の実践』、pp8～9、あすなろ書房、1984
- 10) 前掲書1)、p149
- 11) 前掲書6)、p17
- 12) 拙稿、「野外教育における造形活動 (第7報)」、名古屋女子大学紀要第41号、pp111～113、1994